

【向田邦子】



(かこしま近代文学館所蔵)

【邦子の弔辞】

当時、日中戦争における鹿児島県出身者の戦没者の合同葬儀が、鹿児島市公会堂（現在の中央公民館）で行われた。

その際、鹿児島市の全小学生の代表として邦子が弔辞を述べており、地元の新聞でも「可憐な弔辞」と紹介された。

## 「故郷もどき」の鹿児島で

むこうだくにこ  
向田邦子

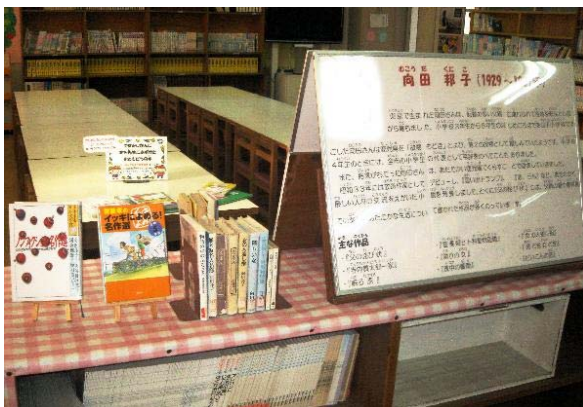
鹿児島市西千石町にある山下小学校。昭和を代表する作家の一人である向田邦子は、二年あまり、この小学校に通いました。三階の図書室には向田邦子のコーナーがあり、そのパネルには、次のように書かれています。

「東京で生まれた向田さんは、転勤の多い父親に連れられて各地を転々としながら育ちました。小学校三年生から五年生までを山下小学校で過ごした向田さんは、鹿児島のことを『故郷もどき』と呼び、第二の故郷として親しんでいたようです。小学校四年のときには、全市の小学生代表として弔辞を述べたこともありました。また、病弱だった向田さんは、暖かい鹿児島でくらすことで元

【教科書の向田邦子作品】

向田邦子の作品「字のない葉書」は、中学二年生の国語の教科書（光村図書）にも登場する。厳格な父の、子どもたちに対する愛情があふれる、彼女の代表作である。

【山下小学校図書室】



【関連年表】

一九二九年 誕生  
一九三九年 鹿兒島市立山下尋常小学校に転入。

一九四一年 香川県に転校。

一九四五年 太平洋戦争終戦。

一九七六年 「父の詫び状」連載開始。

一九七九年 「鹿兒島感傷旅行」発表。

一九八〇年 直木賞受賞。

一九八一年 死去

気になっていきました。昭和三十三年放送作家としてデビューし、『思い出トランプ』『あ・うん』など温かく優しい人々の交流を主とした小説を発表しました。特に、『父の詫び状』には父の愛や鹿兒島での楽しくあたたかな生活について書かれた作品が多く残っています。」

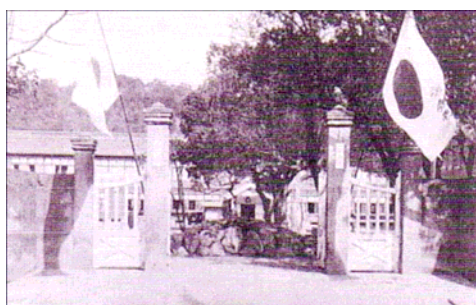
向田邦子が、私達の住んでいる鹿兒島に、とても親しみを持っていたことが分かります。

「向田は、小柄こがらでやせているのに活発な子だった。冬でも冷たい鉄棒にぶら下がっていた。だれとでもつきあって遊んだ。転入生が来ると、学校から外の遊び場まで案内して回っていた。」

と、当時の担任の先生は話しています。読書も大好きだった邦子は、その頃にはアンデルセン童話やグリム童話を読むことは卒業し、友達が回し読みしている吉屋信よしやのぶ

【エッセイ集「父の詫び状」  
向田邦子の代表的エッセイ集である。表題作のほか、「隣の神様」「記念写真」「お辞儀」「細長い海」「ごはん」「お八つの時間」「薩摩揚」「卵とわたし」などが所収されている。

【山下尋常小学校校門の写真】



【吉屋信子】

大正・昭和初期にかけて活躍した小説家。「花物語」は、吉屋が小説家として手がけた初めての作品である。少女の繊細な心模様を数々の花に托した五十四の短編からなる連作集で、日本の少女小説の代表的作品である。

【納戸】

屋内の物置で、寝室に用いることもあった。

子の「花物語」などを読んでいましたが、いまひとつ夢中には、なれていませんでした。

邦子が五年生の時のことです。邦子は家の四畳半くらいの納戸にこっそり入り、父の本を眺めていました。

そこには、「明治大正文学全集」「世界文学全集」などがずらりと並び、一番端にあった「夏目漱石全集」の箱からは、赤と緑の布張りの背表紙がのぞいていました。

邦子は吸い寄せられるように、その第一巻を手に取って、ページをめくります。

「吾輩は猫である。名前はまだ無い。」

親に内緒で父の本を読むという緊張感が、この一行ですつと消えていき、あとはもう、面白くて面白くて、たまりませんでした。邦子は、眠ったり学校へ行ったりするのが惜しくなるくらい、この本の世界に吸い寄せられていきました。

【夏目漱石】

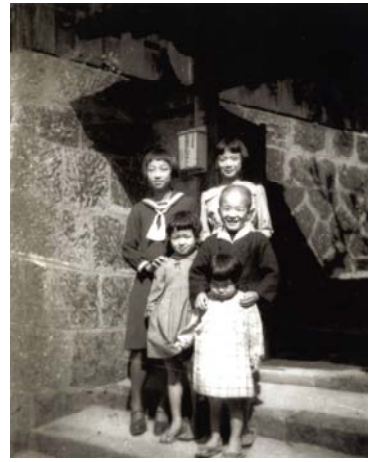
明治・大正を代表する文豪。本名は夏目金之助。小説家であり、評論家、英文学者でもあった。「吾輩は猫である」は処女作であり、他にも「坊ちゃん」「草枕」「三四郎」「それから」「門」「こゝろ」など、数多くの作品を発表している。

【漱石との出会い】

後に邦子は、「なんだか、わからないけれど、大きくて深くて怖いもの……これを教えてくれたのが、この本だったように思いました。」と、自身の「一冊の本」というエッセイで述べている。

【家族写真】

(自宅周辺にて 最後列右端が邦子)



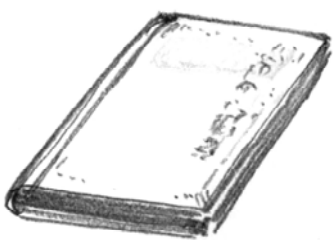
(写真提供 厚地恵美子氏)

邦子はその後も、よく納戸に行つて、父の本を読むよ  
うになりました。納戸には、牢屋らうやのような小さな明り取  
りの小窓があるだけです。明るい光が縞しまになつて差し込  
み、夏みかんやびわの生い茂る裏山の匂いも、風と一緒に  
入つてくるのでした。邦子は、ヤモリやムカデが落ち  
てこないか用心しながら読み続けました。母や祖母の気  
配がすると、納戸の隣の子ども部屋に飛び込んで、見つ  
かつたときのために用意していた、「良寛りょうかんさま」とい  
う自分の本を上へのせました。

邦子は、この本から、いや、夏目漱石から、手加減てかげんの  
ない言葉で世の中のことを話してもらっているような、  
一人前の大人として扱あつかわれているような気がしました。  
そして、たわいない兄弟げんかや、おやつおやつの大きい小さ  
いで泣いたりすることを、ばかばかしく思えるようにも  
なつていったのです。いつしか邦子は、ランドセルに世

【考えてみよう】

読書を通して、自分の考え方が  
変わったり、何かを発見できたり  
した経験はないだろうか。



### 【除夜の鐘】

山下小の児童の作文や詩を集めた「やました」第十四号（一九四一年）に、邦子が五年生の時に書いた「除夜の鐘」という詩が載っている。

### 除夜の鐘

五ほ 向田邦子

照國神社は初詣の人で一ぱいだ  
月も無い真暗な闇の夜だ  
石段を登りつめると  
左右にかがり火が燃えてゐる  
時々ばちちと音を立てながら高く燃え上る

### 眞赤な焰が

人々の顔をかすかに照らし出す  
あたりは眞の闇に包まれて多くの人々の足音だけが聞える  
私は弟とおされながら  
お父さんの袖につかまつて  
やつと拜殿に進み  
禮拜をすませた西本願寺の方から  
鐘の音が聞えて来る  
思はず耳をすませる  
「除夜の鐘だ」  
とお父さんがおつしやつた  
それは新しい年を迎へる喜びの響だ

界文学全集を入れて学校に行くようにさえなりました。

この頃の読書を通じて、邦子の感性は芽生え、大きく伸びていったのでしよう。邦子が五年生の時に書いた、

「除夜の鐘」と題した詩が、当時の山下小学校の詩集に載せられています。他の児童の大半は、兵隊や演習について書いていたのですが、邦子は、家族とのふれあいを細かく描写していました。後にドラマの脚本やエッセイ、小説を書いて身を立てていく向田邦子の基礎が、鹿児島での小学生時代に培われていっていたのです。

大人になった邦子は、映画雑誌の編集の仕事のかたわら、ラジオやテレビドラマの台本を書く脚本家として活躍するようになりました。そんな中、一九七五年（昭和五十年）、四十六歳の邦子は癌にかかってしまいました。癌の手術は幸い成功し、回復に向かっていたましたが、手

### 【脚本家・向田邦子】

邦子は、昭和三十九年のテレビドラマ「七人の孫」で売れっ子となり、以後、「だいこんの花」（昭和四十五年）、「寺内貫太郎一家」（昭和四十九年）、「阿修羅のごとく」（昭和五十四年）、「あ・うん」（昭和五十五年）、「隣の女」（昭和五十六年）など、千本以上のテレビドラマの脚本を担当した。

絶妙な台詞と巧みな構成は、「向田ドラマ」と呼ばれ、人気を博した。

術の後遺症で、利き腕の右手が不自由になってしまいました。

ちようどその頃、タウン誌からの連載の依頼を受けた邦子は、迷ったあげく、左手で書くことを決意します。

そして邦子は、鹿児島で過ごしたことの思い出や自分の家庭の回想を中心に、日常的话题を盛り込んだ随筆ずいひつを連載し、これが後に「父の詫び状」というエッセイ集となつて出版され、向田邦子の代表作の一つとなりました。邦子は、本のあとがきで、次のように述べています。

「その頃、私は、余り長く生きられないのではないかと思っていた。考えた末に、書かせていただくことにした。テレビの仕事を休んでいたので閑ひまはある。ゆっくり書けば、左手で書けないことはない。こういう時にどんなものが書けるか、自分をためしてみたかった。」

邦子は、「父の詫び状」が出版された後、約四十年ぶ

【向田作品の鹿児島】

向田邦子の作品の中で、鹿児島の思い出が綴つづられたエッセイは、「良寛さま」「お弁当」「う」「小さな旅」一冊の本、吾輩は猫であるなど、二十作品にも及ぶ。

【タウン誌】

地域の情報誌。

【考えてみよう】

邦子は、当初、癌であることを公表していなかった。

左手で執筆しつすることに決めた、邦子の思いを考えてみよう。

【向田邦子の作品から】

「鹿児島感傷旅行」

三年ばかり前に病気をした。

乳癌がんという辛気しんきくさい病名だったこともあり、日頃は極楽とんぼの私わたくしが柄にもなく、入院中のベッドで来し方行く末に思いをめぐらすこともあった。万一再発して、長く生きられないと判わかったら鹿児島へ帰りたい。

昔住んでいた、城山のならびにある上之平うへのひらの、高い石垣の上に建っていたあの家の庭から桜島を眺めたい。知らない人が住んでいるに違いないが、何とかしてお庭先に入れて頂いて、朝夕眺めていた煙を吐くあの山が見たかった。うなぎをとって遊んだり、父の釣のお供をした甲突こうつき川や、天保山海水浴場を見たかった。山下小学校の校門をくぐり天文館通りを歩きたかった。友達にも逢いたかった。

帰るといつても、鹿児島は故郷ではない。保険会社の支店長をしていた父について転勤し、小学校五年六年の二年を過ぎた土地に過ぎないのである。しかし、少女期の入口にさ

りに鹿児島へ旅行に出かけます。この時の様子を書いた

「鹿児島感傷旅行」という随筆では、

「万一癌が再発して、長く生きられないと判わかったら、鹿児島へ帰りたい。帰るといつても、鹿児島は故郷ではない。父の転勤について引越し、小学校の二年間を過ぎた土地に過ぎないのでから。しかし、少女期の入口にさしかかった時期を過ぎたせいか、どの土地よりも印象が強く、故郷の山や川を持たない東京生まれの私にとって、鹿児島はなつかしい『故郷もどき』なのだろう。」という風に書かれています。

鹿児島で過ごした時期は、二年余りという短い時期でしたが、小学生時代に「夏目漱石全集」などを夢中で読んでいたことや、城山の麓ふもとの家から眺めた雄大な桜島の風景、食膳しょくぜんをにぎわした鹿児島の郷土料理、よく遊



しかかった時期をすごしたせいか、どの土地より印象が強く、故郷の山や河を持たない東京生れの私にとつて、鹿児島はなつかしい「故郷もどき」なのである。(抜粋)

んだ甲突川や天保山海水浴場、この時期の母が一番笑い上戸<sup>じょうし</sup>で家が活気に満ちていたことなど、鹿児島での楽しく充実していた生活をなつかしく感じていたのでしょう。「父の詫び状」に収録されている、「細長い海」「薩摩揚」などの邦子の作品は、普段の私たちが当たり前のように感じている鹿児島の自然や食べ物豊富な感受性で描き、その魅力<sup>みりよく</sup>を再発見させてくれるものです。

鹿児島に来た邦子は、すっかり変わった鹿児島の街の様子に驚きながらも、昔のままの桜島をなつかしく眺め、「桜島を母にも見せたい。」と思いました。また、小学生時代の友達や先生と再会し、思い出話に花を咲かせました。

「あれも無くなっている。これも無かった。結局変わらないものは人。そして、生きて火をはく桜島であった。」と、鹿児島を再び訪れた感想を話しています。

#### 【晩年の向田邦子】

邦子の文章は、鋭い人間観察に基づく描写が特徴で、小説家としても高い評価を得た。一九八〇年（昭和五十五年）には独特の感性で書いた三つの短編「花の名前」「かわうそ」「犬小屋」(「思い出トランプ」所収)で、第八十三回直木賞を受賞している。

直木賞を受賞した年には、NHK紅白歌合戦の審査員も務めたが、翌年、不幸にして飛行機事故で亡くなる(享年五十一歳)。

一九八二年(昭和五十七年)には、優れた脚本家に与えられる「向田邦子賞」が創設された。





【向田邦子居住跡】

邦子は、その後も作家として活躍を続けました。不幸にも飛行機事故により五十一歳の若さで亡くなりましたが、死後三十年以上たった今でも、邦子のエッセイや小説は多くの人々に愛読されたり、テレビで、特集番組が放送されたりしています。

「向田家にとって、鹿児島時代は楽しい思い出がいっぱいあり、輝いていました。」

と母の向田せいさんは話し、向田邦子が「故郷もどき」と呼んだ鹿児島市に、邦子の遺品の管理を任せることにしました。

戦争が激しくなる少し前の少女期を、鹿児島で過ごした向田邦子。時代や街並みは変わりましたが、今も彼女の思いは、鹿児島に残されているのです。



(鹿児島市)

【かごしま近代文学館】  
かごしま近代文学館には、向田邦子の直筆原稿や構想メモ、愛用のカメラや山下尋常小学校時代の賞状など、約九千五百点以上の資料が保存してある。

【考えてみよう】  
「鹿児島のよさ」を感じるのとは、なんと違うだろうか。また、みなさんにとって、「鹿児島のよさ」とは何だろうか。

---

---